

# 加賀タウン・ミーティング

<u>総合テーマ</u>	「地域が金沢大学に望むこと」
<u>日 時</u>	平成15年2月7日（金）19:00～21:00
<u>場 所</u>	セミナーハウスあいりす（加賀市）
<u>総 合 司 会</u>	太田 義興（金沢大学企画広報室長）

## 挨拶

中村 信一（金沢大学副学長、金沢大学地域貢献推進室長）

### 今後の大学のあり方と地域貢献

大学の使命は教育と研究だといわれますが、最近いわれているのは、大学も社会貢献をしなければいけないということです。これは、産学官連携で新しい産業を興すことなどもありますが、これからはもっと身近な地域貢献をしなければいけません。

文科省が平成14年に地域貢献特別支援事業を公募し、全国75大学が応募して15校が選ばされました。金沢大学はその中でもモデル事業として期待され、このタウン・ミーティングを含む10の事業を立ち上げて地域貢献を推進しているところです。

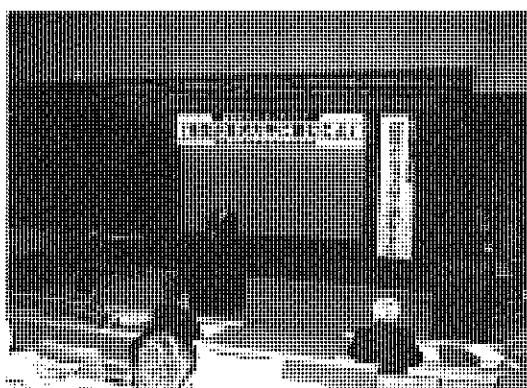
このタウン・ミーティングは能登、加賀、金沢市で開かれます。ここで地域の皆様方の金沢大学に対するご要望に十分耳を傾け、その中から金沢大学がいかにして地域貢献ができるかを考えさせていただきたいと思っておりますので、ぜひとも忌憚のないご意見をお願いいたします。

北澤 陸夫 氏（加賀市教育長）

### 金沢大学への地域の期待

タウン・ミーティングにたくさんの方にお越しいただき、心から感謝を申し上げます。本日のパンフレットには「加賀の皆さんのお声を聞きに参りました」と書かれています。これを読んで、金沢大学と地域が非常に身近になったと感じています。

金沢大学が地域に何を伝え、何を求めているのか。また逆に、地域は大学に何を望み、何を期待しているのか。今日は意見を出し合うことでそれを深め、ともに社会の中で教育欲が高まっていけばと考えま



す。

個人的には、金沢大学の学生さんにボランティアとして学校教育のどこかの部分に参加し、支援していただく機会があれば大変うれしいと思っています。今日は、会場の皆さん方の金沢大学への期待感がどのような声として出てくるか、大変期待を持ってこの席に参加させていただきました。

### 話題提供 金沢大学から

#### 「大学は地域から何を学び何を伝えるのか」

鹿野 勝彦（金沢大学文学部長）

##### 地域と人材育成

私は、文学部の文化人類学研究室で教えています。そこでは毎年、調査実習で県内の地区で1週間ほどお世話になり、直にお話を伺わせていただいて学生たちにレポートをまとめさせます。この加賀でも95年、96年に調査をさせていただきました。

大学の仕事で一番大事なのは、当然のことながら学生の教育です。そして、私にとって一番大きな比重を持つのが、現場へ出て調査のしかたを学ばせていただくことです。その対象が地域であり、大学が地域に貢献するどころか、地域の中で教えていただき、鍛えていただいた学生たちは育っていくのです。

地域の皆さんのお話を伺う中で、最初は引っ込み思案だった学生たちが、後半になると一人一人が自分でテーマを決めて動き出すようになります。このような経験は、我々がキャンパスでいくら教えてもできません。実は一番基本的な大学の教育も、地域の方々の力を借りしながら進めているという事実があります。

それを今度は我々の側から地域にどのように還元していくかといえば、今まで育てた学生たちが地域で人材として働くことでした。その基本的なところは今後も続いていきますし、さらに大学教育を通じていかに社会に貢献できる人材を育てていくかについて今後も考えていかなければなりません。



##### 大学における研究と地域との結びつき

2つ目の大学の大きな仕事は研究です。研究では、我々教員たちがそれぞれに個人あるいはチームで研究者として仕事をし、それを社会にどう還元していくかということになります。私の場合は、ネパールを中心としたヒマラヤのふもとの村々の研究を40年近く続けてきました。その成果は、本にまとめたり、講義や講演などでお話ししたりすることでお返しすることになります。ただ、本を書いても日本語ですと、私が勉強させていただいた人たちが読んでくれることはあまり期待できません。そういう意味では何の役に立つかと言われると大変つらいのですが、それでも、例えば日本とネパールの国際協力に関することでお役に立てることもあり

ます。このように、大学の先生たちにはそれぞれ結びつきのある地域・領域があり、その研究には現場で学ばせていただくことが不可欠なのです。

では、そうして学ばせていただいたものを我々がどう地域に還元していくかというと、短期間で直接役に立つかたちでお返しすることはなかなかできません。しかし、長い目で見れば必ず貢献しているはずです。問題は、これまで我々がそれをきちんと説明してこなかったことなのではないかと思います。

##### 地域の方に教えていただくこと

大学の3つ目の大きな仕事は診療です。これは、医学部があり附属病院を持っている場合に限ますが、おそらく地域貢献という意味では最もわかりやすい仕事といえるでしょう。しかし、実はこれも一方で地域の方にずいぶん教えられているのです。以前、金沢附属病院長をしていた先生がいつも「患者様」と言っておられたのをとても印象深く覚えています。「お医者様」ではなく「患者様」という意識があつてこそ医師は育つべきだと思っています。

また、長野県の佐久総合病院におられる若月俊一先生が、『農村医学』という本を書いておられます。これは、昭和20年代から30年代前半の佐久地方の農民特有の病気や症状を調査したもので、中でも当時の農民の生活が徹底的にこと細かく書かれています。もちろん医師が患者をどう治療すればいいかというときに使う基礎的な調査として行われたのですが、どんな民俗学者もできないほど丁寧な調査を行っています。裏返すと、その調査を受け入れた村の人々も、よくそこまで正直に答えてくれたと思います。これは医師と患者によほどの信頼関係がなければできないことです。

地域と大学の関係もそうあるべきでしょう。我々が偉そうな顔をして聞きに行つたのでは、決してきちんと教えていただけません。そんな中途半端なかたちでは、学生を教育することも、我々が研究することも、ましてや地域貢献もできるはずがありません。

正直に言って、我々がやっていること、特に文学部でやっていることでどれだけお役に立てるかはわかりません。それでも、やはり大学と地域の皆様とのきちんとした信頼関係を築かなければ、最も基礎的な教育や研究もできないということは身にしみて感じています。その第一歩として、今日は本当に忌憚のないご意見を伺えればありがたいと思っています。

### 話題提供 地域から

#### 「大学に望むこと」

田島 昭夫 氏（前公民館長、金城大学講師）

##### 勅使地区の歴史について

私は大学のことについてそれほど詳しく知っているわけではありませんので、私の夢を言うことで務めを果たさせていただきます。

私が公民館の館長を務めていた勅使地区は、歴史的な名前を持ちながら書かれたものが何もないということで、私も勅使地区の歴史の1ページを開く仲間にいました。調



べているうちに、この地域が非常に歴史を持った地域だということがわかつきました。縄文文化、弥生文化の遺跡もあり、古くからのお寺もたくさんあります。さらに、鞍掛山はなんと2400万年前に海の中から固い溶岩が盛り上がってできた火山であったという話まで出てきました。実は、地域の歴史を探るためには地質から調べる必要があるということで、金沢大学の地質研究室の先生にもいろいろ本を紹介していただき、私どもとしてはすでに金沢大学にお世話をなっているのです。

#### 地域文化の形成と大学とのかかわり

歴史の勉強をする中で、古くからあるこの地域を21世紀にどう残していくべきかというところに突き当たりました。遺跡を中心とした研究を進めながら、私たちの夢は暮らしの文化をどう形成していくかという地域づくりにまで行き着いたのです。

今、片山津温泉では旅館があいてきたという話もあります。もし大学に協力していただけるのであれば、原点に戻って温泉の癒しという面で何か片山津のお湯を使うようなことをお願いできないか。あるいは、柴山渕や動橋川とのかかわりで、リサイクルを含めた環境面で今後私たちはどう生きていったらいいのか。そういうところで、子どもや高齢者も参加できる体験の場ができるなど、大学のお知恵をいろいろなところでお借りしたいと思います。

さらには、加賀市に暮らしの文化を創造する科学技術博物館のようなものをつくり、我々がいかに生きていくべきかということを、エネルギーから農業問題まですべて含めて、実験できたり、勉強できたりする場にしていただきたいと思います。

この地域の昔からの流れを研究していただき、そこから新しい文化を形成する場としてどのようにしていけばいいのか、21世紀に生き残ることができる地域づくりはどうあればいいかという研究の応援をしていただけるなら、これほど幸せなことはないと思います。

#### 話題提供 地域から

#### 吉田 栄治 氏（はづちを事務局代表）

#### NPO「はづちを」の活動

「はづちを」は、加賀市が取得した山代温泉中心地の土地に、厚生労働省の補助金をいただいて建てられた高齢者の介護養護事業施設で、地域のにぎわいも目的とした市の交流施設であると私たちはとらえています。それを市民団体が委託管理を受けるというかたちで運営しております、それがはづちを事務局ということです。

私たちは、NPOといわれている形態で運営しています。NPOとは、市民によって組織された収益を上げない会社のようなものです。そうはいっても、収益を上げてそれを事業に費やすことはあります。ただ、お金を出資した人たちに、株式会社のように再分配はしません。

私たちは、会員といわれるまちづくりの有志が集まって会費を出し、そのほかに寄付金や施設を使った営業で上げた事業収益などを使ってまちづくりを行っています。出資した人の利益は、まちがにぎやかで明るくなつて自分たちが幸せになる、南加賀がいいまちになるということ、それが私たちのまちづくりNPOの理念です。

ただ、石川県ではこのような手法がまだ確立されていないので、市民はまだまだ自立してお

らず、それを支える力をとても必要としています。行政にも、NPOを理解していらっしゃる方が非常に少なく、こういった組織とのつきあい方を一生懸命摸索しているというのが現状です。

「産学官」という言葉がありますが、これからはそこにもう1つ、「民」が入るべきではないでしょうか。今、市民は自分たちの共益や思いをかたちにするために、いろいろな課題の下にどんどん組織されつつあります。それを支えるのは市民自身であり、さらに官である行政のパートナーシップと、学である大学の先進的なものを見られる若い力とそれを指導されるプロフェッショナルな大学の先生方の力です。ことに学には、行政に対しては法的なものやフィールドワークなどの力添えを、市民に対しては環境やコミュニティづくりに関する専門的知識を与えていただきたいと思います。

#### まちづくりから大学に望むこと

私たちは大きな施設の運営については全く素人です。私の前職は九谷焼のろくろ職人でしたし、ほかにも眼鏡屋さん、お菓子屋、サラリーマンなどが集まって市民団体を作っています。それでも、市民に責任がありますから、プロの知識も欲しいですし、そんな私たちとつきあわなければならぬ行政の人たちに対するアドバイスもいただければと思っています。

ちなみに施設管理では、市民と行政の契約は非常にあいまいな私たちであったりします。そこで、市民と行政がともに歩み、いい方向に行くための仕組みづくりのところで学から後支援が必要なのです。また、まちづくりにゼミやサークルの学生さんが入って、一緒にまちづくりの調査や研究をしているという話も聞いています。私たちのまちでもそういうフィールドワークをしていただけることを切望しています。

私たちがしていることは専門的なことではなく、お預かりした施設でいかに地域の人たちに貢献できるかということです。例えば私たちの地域は温泉町なので、夜の仕事をしている両親がいるため、朝ご飯を食べられない子どもたちがいます。そういう子どもたちが健康に過ごせるように、安い食事を提供する仕組みができないか。同じように、一人暮らしの食事についてもそれをうまく立ち上げ、さらに継続的に事業としてやっていくためには、素人ではフィールドワークができません。子どもたちや高齢者の方の食生活の実態を調査したり、そこから何をどうすべきかといった専門的な部分を一緒に考えてくれる人がいるとうれしいと思います。

また、施設の空いたスペースを使って、高校生たちが地元の文豪の文庫を作ろうとしています。ただ、彼女たちには、どういった本をそろえればいいかとか、その本自体を購入する資金をどう作るかというような知識が足りません。そこに、コミュニティビジネスや地域活動を研究している学生などが一緒に入って、そこでフィールドワークも兼ねて活動していただくと大きな支援になります。

一般に大学生は遊んでいるというイメージがありますが、そうではないところを見せていただけば、子どもたちも「私も金沢大学に入りたい」となって、私たちの地域も非常に質が高くなつて楽しいまちになるでしょう。

ほかにもまちづくりの観点から大学に望むことはたくさんありますが、産学官に民をプラスしていただき、行政と市民の知識不足のパイプを、学というプロフェッショナルで先進的研究をしておられる方々の知恵でつないでいただきたいと思います。

## 西出 大進 氏（株式会社ネイブ社長）

### 企業の立場から大学に望むこと

私どもは小さな会社ですが、いろいろな研究をしています。将来生き残らうと思えばしなければならないのです。大企業と組んで新しいものづくりの開発もしていますし、福祉や教育関連のものも何かできなかといふことでやっています。

金沢大学の先生方とも実は共同研究をする機会を得ました。その中で一番感じるのは、金沢大学の先生方、あるいは学生さんが持っている知識、技術、情報が本当にすばらしいということです。我々が何年かかっても手に入れることができない知識や情報をたくさんお持ちです。しかし、残念ながら、それが全然外に出てきません。ですから、それをぜひ我々にわかるように紹介してほしいのです。そうすれば、加賀市という地域にある企業でも世界に飛躍できるチャンスが生まれるのではないかと思っています。



### 「読み・書き・聞き」の教育

今、私が一番心配しているのは、日本の子どもはどうしてしっかりしていないのかということです。親もしっかりしていないのはもちろんですが、先生もしっかりしていません。それは、難しいことやかっこいいことを教えようとしているからではないですか。

やはり小さいころから、読み・書き・聞きを徹底的に教えればいいのです。聞く耳を持つ者は、自然にいろいろな情報を取り入れますから、もっと難しいことを覚えようという気になるはずです。学校に行っても、先生の話も聞かず走り回っている子どもがいますが、あれは聞かせるだけのしつけができない先生が教育しているからです。

私は会社で「挨拶のできない者は会社に来るな、聞く耳を持っていない人間は来るな」と言っています。そうすると、最初は小さな声の者も、徐々に大きな声が出るようになります。大きな声が出る人間は、会社でも間に合うようになります。いつまでも大きな声で挨拶ができない人間は、聞くことも下手ですし、自分で勉強して前に出ようという力が足りません。

金沢大学教育学部では、ぜひ読み・書き・聞きをしっかりできる子どもを育てられる先生を育ててほしいと思います。

### 金沢大学における地域貢献推進事業の紹介

#### 水野 昭憲（金沢大学地域貢献コーディネーター）

国立大学が地域貢献特別支援事業に取り組んだのは、平成14年度になってからです。この事

業は、文科省が全国の国立大学が応募した中から採択したもので、今、15の大学でこの事業が行われています。金沢大学では、石川県や金沢市と連絡協議会を作り、そこで事業を決めながら進めています。その事業の中から、典型的なものをいくつかご紹介します。

まず、角間の里山自然学校という事業です。これは、金沢大学の角間キャンパス約200ヘクタールのうち74ヘクタールの里山ゾーンを、研究に使うだけでなく、地域の人たちの自然観察の場、あるいは子どもたちのいろいろな体験の場に開放しようという活動です。この活動については、大学だけでなく多くの市民団体や金沢市子ども科学財団などと連携しながら進めています。

つぎに、子育て支援システムの構築です。最近の核家族化に伴い、お母さんだけで子どもを育てている中で、経験がなく悩んでおられる方が非常に増えています。一方で、不登校などの問題的行動を持つ生徒を抱えた学校の先生もおられます。今まででは先生たちを救う手があまりありませんでした。この事業はそういう方たちのご相談に応えるものです。

先程、大学の情報発信がうまくされていないというご指摘がありましたが、我々としてもその反省から、人的資源のデータベース化に取り組んでいます。この事業では、学内の先生の研究や講演のテーマを目録として出しておき、講演を希望される場合や、企業の共同研究も含めたいろいろなご相談の参考にしていただきます。まもなく本とディスクができますし、インターネットでアクセスできるような情報網も開こうとしています。

このような事業を通じて、金沢大学は少しでも皆さんのお役に立ちたいと考えています。

### 意見交換

#### 「加賀地域と金沢大学」

司会 水野 昭憲（金沢大学地域貢献コーディネーター）  
奥野 耕市（加賀市教育委員会生涯学習課主査）

（水野）ここからは、大学と市民・地域がどう結びついたらいいかという自由な議論をしたいと思います。

#### 地域が望むことと大学の地域貢献

（納谷）大学の中にはいろいろな研究施設や研究学部がありますが、内容がよくわかりません。そういうものをインターネット上で開放していただけると、わざわざ出向かなくても対話ができます。また、私たちが一番必要なものは先端技術であり、それをどうしたら地域に貢献できる新しい商品、サービスに結びつけられるかというところです。地域の中小企業は、研究費がなく十分な研究はできません。その辺で大学にお願いできる部分があれば共同でやっていただけるといいのではないかと思います。

そして、地域から大学への要望を聞く前に、まず大学とはこういうものだということを明確にされる必要があると思います。大学が、地域が望んでできあがったものならば、それは十分理解されるはずです。今回のことでも、こういうことをやりましたという実績を作るだけで行動に移さなければ

ば意味がありません。そういう意味で、実質的なネットワークの構築をお願いします。

#### 大学のコーディネート機能と情報開示

(中村) 産業に関しては、大学内に共同研究センターを設け、今おっしゃったようなことを行っています。これまで日本では、特許など大学の先人たちの知識の多くが眠ったままでした。アメリカでは1980年代からバイ・ドール法というもので大学と産業界を結ぶような仕掛けが作られています。日本でもようやく昨年の5月から特許が機関に属すことになり、大学の知的財産を産業界にもっと直結しようということで、TLOという組織ができました。北陸地方では金沢大学が最も早く昨年12月26日にその承認を受け、今、その会員を募集しているところです。会員になられた方には、いち早く金沢大学の最新の特許情報を開示していくことになります。

インキュベーションセンターやインキュベーションラボラトリもでき、そこで共同研究ができるようになりました。その情報も会員の方にはいち早くネットで流すことができます。さらに、金沢大学に知財本部を作り、そこで産業界と大学を結びつけるコーディネート機能を果たせばと考えています。

情報については、これからもホームページを充実させ、地域の皆さんがあと早くご希望の情報に接続できるように努力したいと思います。

#### 広域的な大学のあり方

(納谷) 最近、一部の大学では、民間とつないで画像解析支援というかたちが出てきています。これを石川県内で広域的に行なうことは考えておられますか。また、金沢に全部の学部が集まっていても活性化にはならないと思うのですが、学部を1つ加賀に持ってくるというお考えはありませんか。

(中村) 画像解析による支援は、実験的にはうまくいっています。それがうまくいけば、おそらく石川県でもネットワークを構築してもっと広い範囲でできるようになると思います。学部については、貴重なご意見として承っておきます。

#### 学生の就職活動のための情報交換

(出村) 私は金沢大学の出身ですが、自分の経験では、就職段階において地元企業の情報がなかなか手に入れられませんでした。これは私の情報収集能力の問題もありますが、地域が大学に情報を求めるのと同様に、大学側も県内の企業にどういう学生を求めているのかという情報を取りにくく必要があると思います。そのような情報交換ができれば、地域に対する人的貢献がよりスムーズになるのではないでしょうか。

(上梨) 昨今の就職状況を考え、金沢大学では就職支援センターを設け、企業の開拓、あるいは学生には就職情報や公務員対策講座を共催するなど、あらゆる面で就職支援活動を行っています。

(中村) 金沢大学の顔が見えないというご指摘もあり、我々は大学への窓口を1つにしています。ご要望・ご相談・お問い合わせは、すべて金沢大学地域貢献推進室へ言っていただければ、そこには必ずだれかがいてしかるべきところへきちんとおつなぎします。そのために地域貢献コーディネーターという役割も配置されました。

(水野) 本日は技術的な面は詳しくお話しできませんでしたが、産学連携については別途組織を持っており、そちらで真剣に取り組んでいます。

金沢大学は、「自然・文化・人づくり・にぎわい」をキャッチフレーズにこの事業を進めていますが、そのあたりで何かご意見はありませんか。

(東木) これは教育学部を中心になると思いますが、人づくりについて地域が一番要望したいことは、地域から信頼され、尊敬される先生をぜひとも養成していただきたいということです。

#### 教員養成について

(鈴木) 私は教育学部の教官ではありませんが、大学教育開放センターで県民の皆さんに生涯学習の場を広く提供する仕事をしています。同じ学内において、金沢大学教育学部もそのような先生を1人でも多く養成しようと頑張っています。ただ、システムとして、大学が直接地域に先生を送るのではなく、そこには教員採用試験というクリアすべきものがあります。そこで選択は県の教育委員会が行っています。

私どもとしては、先生が現場に採用されてからの悩み事の相談や、あるいはレベルアップのための再研修などを一緒に行い、さらに大学での教員養成に還元していきたいと思っています。

(中村) 昨年から教育学部の学生教育法を改善し、小・中学校の現場をより重視することにしました。今、猛烈に変わりつつあり、これからはもっと地域から尊敬される先生の育成ができるようになると思います。

(鹿野) 大学では、教員資格を取るために学生にさまざまな現場体験をさせています。今までも教育実習はありましたが、さらにその期間を長くし、介護体験実習なども導入しています。

これについては、訓練の十分に行き届いていない学生の実習を受け入れる施設の皆さんはなかなか大変だというお話を伺っていますが、それを通じて学生が本当に育っていくわけです。大学で得た知識を現場で実践し、鍛えていただいてお返しいただくというサイクルをしっかりと作ったうえで、地域へ卒業生を送り出していきたいと考えています。

(東木) 生涯学習という点で、今年の10月7日に、加賀市で初めて石川県公民館連合会の大会が開催されます。これは社会教育、生涯学習にかかるものですが、そのときに生涯学習にかかるアドバイスあるいは講演をお願いできればと思っています。

(奥野) 先程、金沢大学が非常に遠いというお話をしましたが、加賀地域の方はどのようにお考えでしょうか。

#### 地域から信頼される先生の育成を

(吉田) 市民の立場で活動をしている中で、プロフェッショナルになりきれないままでも、NPOのような組織を持っていると人を雇用する可能性が出てき



ます。そんなときに、大学に知識や人材面でのご指導、ご支援をお願いしたいと思います。

ただ、金沢だと結構遠いのです。それは物理的な距離だけでなく、産学官はこれまでの実績もあり近いと思いますが、我々のような新しい実験的なことをしている者にとって、それぞれとの間にまだ距離が感じられます。これからどんどん市民が組織化されてきたときに、その距離を縮めるような何かもう1つのプラスアルファをいただきたいと思います。

(鹿野) 少し前に、同じタウン・ミーティングを輪島で行っています。加賀は遠いと言われましたが、能登はもっと遠くて、同じ県内でも珠洲に行こうと思うと大阪よりも遠いのです。そういうこともあって、我々の初中等教育支援というプログラムでは、より遠いところにターゲットを絞ってやることもあります。これから中高を拠点にしながらネットワークを作っていく、徐々に交流を広げていきたいと思っています。

#### 産学官民連携による活動を

(中村浩二) 私は先程ご紹介した里山自然学校をやっていますが、今日こちらに伺って、加賀市は非常に自然に恵まれていると感じました。私たちの大学のある角間の里山も自然は豊かですが、金沢市街に近いこともあります。こちらの自然とはずいぶん様子が違っています。

鴨池はラムサールで保護されている特別な場所です。鹿島の森も、植物の遷移が非常に進んだ、ほかにはない森だと思います。このような加賀の自然と角間のような自然と一緒にフィールドとして使い、そこで汗を流しながら何かを考えていけないでしょうか。

先程から教育問題でかなり厳しい意見が出ていました。そこで、私がやっていることを1つだけご紹介しますと、大学の里山を使って小学校・中学校の先生の自然教育や総合学習の研修会をしています。それは、学校の先生20~30人で一緒に山を歩く研修です。

それで驚くことは、先生自身が全く何もできないことです。そして、はっきりしていることは、一度だけ一緒に山へ行って私たちがいろいろな解説をしたりしてもだめで、何度も同じところに来なければいけないということです。それはべつに角間でなくてもかまいません。加賀市もずいぶん山を持っていますから、そこでいろいろな研修をされればいいと思います。そのときに、もし必要であれば私たちがお手伝いしますし、私たちだけでなく一緒に里山をやっておられる方が加賀市にもたくさんいらっしゃいます。

NPOの話に関しては、今日は私もずいぶん勉強になりました。角間の里山自然学校でも、実際に動いているのは何人かの教員と事務官のボランティアです。それに市民の方が参加されているかたちになっています。要するに、少しの人数が本業を横に置いて里山活動のボランティアをやっているわけです。県でも石川自然学校をつくって里山でいろいろなことをやっていますが、それも県の役所の仕事をしながら、少数の人がサービスをしているわけです。しかし、そんなことはいつまでも続かないだろうと思っています。

ですから、私たちが今考えているのは、それぞれの団体にいる少数の人たちが一緒になって活動できないかということです。それこそ産学官民が一緒になって、どうすればお互いに労力を軽減してうまく活動していくか、そして自由に意見交換ができるかを考えたいと思っています。



#### おわりに

(水野) 今日の短い議論の中で、いくつかのキーワードが出てきました。最後に中村教授が言われたことも、仕組みやパイプを求めていたということでした。県は官のシステムであり、大学も実は官のシステムの中にあるところがあって、今まで難しかったけれども、大学もやはり地域住民とのつながりを求めていたのです。

最後に、今日の皆さんのお話を伺いながら、貢献や支援ということは大学側から言ってはいけなかつたのではないかという気がしています。かといって、この事業の名前は文科省の予算用語なのでこの言葉はなくなりませんが、この場は皆さんとの連携をどうしようかというものです。

たびたびこのような会を持てると限りますが、これを機会に我々が窓口を広げて皆さんのご意見をお待ちしていることを承知いただき、さらにお話を続けていければ幸いです。

日 程

日 時	2月7日（金）19:00～21:00
会 場	セミナーハウスあいりす（加賀市山田町リ243）
主 催	金沢大学・石川県・金沢市連絡協議会
共 催	加賀市、加賀市教育委員会
大 学 側 出 席 者	中村(信)、水野、中村(浩)、鈴木、太田、山本、岸本（以上推進室）鹿野（講師） 葛城（総務課）村田（企画広報室）上梨（学生課） 計11名

プロ グラム

テーマ：「地域が金沢大学に望むこと」

総合司会：太田 義興（企画広報室長）

プログラム（19:00～21:00）			
19:00 ～19:10	10分	挨拶	大学：中村 信一 副学長 (地域貢献推進室長) 加賀市：大幸 甚 加賀市長 (代理：教育長 北澤 陸夫)
19:10 ～19:40	30分	話題提供（大学から）	「大学は地域から何を学び何を伝えるのか」 鹿野 勝彦 文学部長
19:40 ～19:55	15分	話題提供（地域から）	「大学に望むこと」 1.田島昭夫（前公民館長） 2.吉田栄治（はづちを事務局代表） 3.西出大進（株式会社ネイブ社長）
19:55 ～20:05	10分	金沢大学における地域貢献推進事業の紹介	水野 昭憲 (地域貢献コーディネーター)
20:05 ～21:00	55分	意見交換会	「加賀地域と金沢大学」 司会：水野 昭憲（金沢大学） 奥野 耕市（加賀市）

出 席 者

90名

金沢大学への要望・意見

金沢大学サテライトの設置	1. 大学の情報公開、公開講座の開講。多くの人が利用しやすい環境を。
大学と地域の交流	1. ゼミや授業、研究、ボランティア等を通して学生と地域の交流 2. タウンミーティングの定期開催 3. インターネット討論会の開催
地域資源の発掘	1. 自然、文化等の地域資源の利用 2. 大学と地域の連携では、地域の特性を生かしたものであります。例えば、温泉を利用した研究、街づくりなど。動橋川流域の自然環境とかかわるくらしの文化を大学の基礎的な研究と共に保存・継承していきたい。
医療問題	1. 石川県内で広域的に画像解析支援
共同研究等	1. 研究協力の期待
情報公開	1. 金沢大学の先生や学生はすばらしい知識、技術、情報を持っているにもかかわらずそれが全然外に出てきません。それをぜひ地域にわかるように紹介してほしい。インターネット等を利用した情報公開等。 2. 人材ネット
教育	1. 読み・書き・聞きの基礎学力のある子どもを育ててほしい。また育てられる先生を養成してほしい。 2. 地域から信頼され、尊敬される先生を。
まちづくり	1. 「産学官」にもう1つ、「民」が入ってくるべきではないか。今、市民は自分たちの共益や思いをかたちにするために、いろいろな課題の下にどんどん組織されつつあります。それを支えるのは市民自身であり、さらに官である行政のパートナーシップと、学である大学の先進的なものを見られる若い力とそれを指導されるプロフェッショナルな大学の先生方の力です。とくに学には、行政に対しては法的なものやフィールドワークなどの力添えを、市民に対しては環境やコミュニティづくりに関する専門的知識を与えていただきたい。 2. 大学と地域との距離は地理的だけでなく、産学官はこれまでの実績もあり近いと思いますが、我々のような新しい実験的なことをしている者にとって、それぞれとの間にまだ距離が感じられます。これからどんどん市民が組織化してきたときに、その距離を縮める協力が必要。
その他	1. 学部を加賀に持ってくる。 2. 地域への人材派遣

## 大学からの提案

1. 大学の使命は教育と研究だといわれますが、最近は、大学も社会貢献をしなければいけないといわれている。産学官連携で新しい産業を興すことなどもあるが、これからはもっと身近な地域貢献をしなければいけない。
2. 大学が地域から学ばせていただいたものを、短期間で直接役に立つ形で還元できないかもしれない。しかし、長い目で見て必ず地域に貢献している。問題は、これまで大学がそれをきちんと説明してこなかったことなのではないか。
3. 大学で得た知識を現場で実践し、鍛えていただきお返しいただくというサイクルをしっかりと作ったうえで、地域へ卒業生を送り出し、地域への人的貢献をしたい。
4. 大学と地域との信頼関係を築かなければ、最も基礎的な教育や研究もできない。

## アンケート結果

回答数：77

加賀タウンミーティングの開催を、  
なにでお知りになりましたか？

チラシ	19
友人	9
テレビ	8
学校	2
ポスター	1
HP	1
ラジオ	1
新聞	1
その他（市からの案内）	5
その他（職場）	5
その他（教育委員会）	3
その他（加賀機電協会）	2
その他（更生保護婦人会）	2
その他（加賀文化塾）	2
その他	2
その他（男女共生室）	1
その他（大学からの案内より）	1
その他（主催側）	1
その他（金大）	1
その他（中村浩二先生と一緒に）	1
その他（市広報紙）	1
その他（行政）	1
その他（公民館）	1

## 金沢大学から

大変良かった	6
まあまあよかったです	33
どちらともいえない	15
あまり良くなかった	6
期待はずれ	2

## 地域から

大変良かった	10
まあまあよかったです	34
どちらともいえない	14
あまり良くなかった	2
期待はずれ	1

## 意見交換会

大変良かった	13
まあまあよかったです	25
どちらともいえない	7
あまり良くなかった	5
期待はずれ	3

## プログラム内容についての評価及び金沢大学への要望について（まとめ）

加賀タウンミーティングでは、まず、「大学の顔が見えない」という批判が強かった。大学の知的財産の情報公開、研究協力体制の整備など、地域から出た要望に対して、大学は既に共同研究センター・TLO・インキュベーションセンター・インキュベーションラボラトリーの設置などの形で対応している。しかし、本ミーティングにおいて再度このような要望が出たことは、大学がこれらのことを見失してしまった、PRが足りなかったということである。

今後、大学の産学連携にかかる協力体制及び地域貢献にかかる協力体制（地域貢献推進室の設置等）をさらにPRしていくなければならない。

街づくりに関する要望も多かった。地域は大学に街づくりに対する専門的なアドバイスを期待している。これまでの産学官の連携に、民を交えた連携をし、「地域と大学との距離」を縮めていかなければならない。

教育問題にかかる大学への期待も高い。大学としては、教員対象の悩み相談や、教員再研修等を実施していきたい。さらに、このことを大学での教員養成に還元する。地域に信頼される人材を養成し、地域に対して人的貢献をしていきたい。